

カイウミヒドラとシワホラダマシ



水族館へ行こう！

京都大学白浜水族館

久保田 信

2008水槽をのぞくと長さが舟ほどの小さな巻き貝シワホラダマシがガラス面をはい回っている。その貝殻の表面全体

ミヒドラだ。オレンシ色の一本一本が個虫で、根のような部分(走根)でつながって群体生活をしている。根にたくさんのとげのようなものが生えるのも特徴である。

10本程度しかない。最多で4個の生殖体がつくられ成熟クラゲとして海中へ泳ぎだす。このクラゲには餌を捕らえる触手はない。有性生殖をして子孫をつくる短命なクラゲで、卵か精子を出したらすぐに死んでしまう。

カイウミヒドラには不慮のことでも死滅してしまわない。シワホラダマシはカイウミヒドラを殻にまとうことで刺胞で武装した

不思議な共生関係

をオレンシ色のコケのようなものが覆っている。このオレンシ色のものは刺胞動物の仲間のカイウ

食して消化する役目を果たすもの(栄養個虫)、刺胞で武装して攻撃するもの(むち状個虫)、次世代をつくるもの(生殖個虫)などが役割分担しているのが分かる。生殖個虫は、栄養個虫よりもほっそりしていて丈が低く、触手数も半分以下の

不思議な生態的性質がある。磯にはたくさん種類にもかかわらず、シワホラダマシにだけしか付着しない。このような共生関係には、お互いに利益を受け、「相利共生」と

ことになり天敵に食べられるにくくなる。現在、カイウミヒドラがこの広い海でシワホラダマシを選ぶメカニズムは分かっていない。貝独特の粘液のおいをかき分けているのかもしれない。

△ シワホラダマシを覆い尽くすカイウミヒドラ (水槽番号2208)

「偏利共生」と「寄生」

(京都大学准教授)